

## 坊っちゃんは高学歴者

清の存在に救われながらも、家族関係では、あまり恵まれないまま成長していく坊っちゃん。当時の小学校を終え、中学校へと進学していく。その間に、まず母親を亡くした。漱石一三歳の時の体験に重ねているのかもしれない。それから六年して、今度は父親をも失う。

母が死んでから六年目の正月におやじも途中で亡くなった。その年の四月におれはある私立の中学校を卒業する。六月に兄は商業学校を卒業した。兄は何とか会社の九州の支店に口があつて行かなければならん。おれは東京でまだ学問をしなければならぬ。兄は家売つて財産を片付けて任地へ出立するといひ出した。おれはどうでもするが宜よかろうと返事をした。どうせ兄の厄介になる気はない。

『坊っちゃん』一

両親が亡くなり、自分の将来を考えねばならない坊っちゃんだ。たった一人の兄との関係も最悪。とりあえずは中学校（旧制中学）は卒業したから、東京に残って、さらに「学問」をつづけようだ。そして、家が売却されるので、神田の小川町おがまちで下宿を始めた。

この小川町、現在はスキー用品店や大手スポーツ店が立ち並ぶ。古書店街で有名な神保町じんぼうちょうも、ほど近い。JRの御茶ノ水駅の方へ向かえば、明治大学や日本大学などもある界限かいわいだ。そう言えば、坊っちゃんは私立の中学校の出身なのか。

九州へ立つ二日前兄が下宿へ来て金を六百円出してこれを資本しよぽいにして商賈しょうがをするなり、学資にして勉強をするなり、どうでも随意に使うがいい、その代りあとは構わないといった。兄にしては感心なやり方だ。何の六百円位貰わんでも困りはせんと思ったが、例に似ぬ淡泊な処置が気に入ったから、礼をいって貰って置いた。

(同)

九州へ赴く兄が、家の売却代金の一部「六百円」を届けに来た。相続財産の分与であり、縁切り金というわけだ。家族が崩壊していく哀しい話。坊っちゃんは、いつも孤独だ。

ここで、「六百円」を現代の価値で調べてみた。森永卓郎監修『物価の文化史事典』（展望社）やら、日本銀行の示す「企業物価指数」やらで計算してみたが、やはり単純比較は難しい。た

だ、おむね一万倍という感じでどうだろう。「六〇〇万円」か？

おれは六百円の使用法について寐ながら考えた。商買をしたって面倒くさくって旨く出来るものじゃなし、ことに六百円の金で商買らしい商買がやれる訳でもなからう。よしやれるとしても、今のようじゃ人の前へ出て教育を受けたと威張れないからつまり損になるばかりだ。資本などはどうでもいいから、これを学資にして勉強してやろう。六百円を三に割って一年に二百円ずつ使えば三年間は勉強が出来る。三年間一生懸命にやれば何か出来る。(同)

なぜか、ここでの坊っちゃんはひどく計画的だ。「六百円を三に割って」進学計画を立てた。さっきの計算でいけば、毎年「二〇〇万円」ずつの教育投資を自分にしようというわけだ。坊っちゃんは、学歴という資本の獲得に動き出した。

それからこの学校へ這入ろうと考えたが、学問は生来どれもこれも好きでない。ことに語学とか文学とかいうものは真平御免だ。新体詩などと来ては二十行あるうちで一行も分らない。どうせ嫌なものなら何をやっても同じ事だと思ったが、幸い物理学校の前を通り掛かったら生徒募集の広告が出ていたから、何も縁だと思って規則書をもらってすぐ入学の手

続をしてしまった。今考えるとこれも親譲りの無鉄砲から起った失策だ。

三年間まあ人並に勉強はしたが別段たちのいい方でもないから、席順はいつでも下から勘定する方が便利であった。しかし不思議なもので、三年立つたらとうとう卒業してしまった。自分でも可笑<sup>おか</sup>しいと思ったが苦情をいう訳もないから大人しく卒業して置いた。(同)

そして選んだのが、「前を通り掛かった」だけの「物理学校」。「無鉄砲」さは忘れていない。ただ謙遜はしているが、規定の三年間で「物理学校」を卒業している。実は、これはスゴイことなのだ。坊ちゃんは、優秀だし自立している。なにより真面目なのだ。そして親を失いながらも、中等教育も高等教育(当時としては微妙だが)も私立学校で受けた、高学歴者なのだ！

ところで、この「ある私立の中学校」と「物理学校」とは、いつたいてこの学校のことだろうか？

## その一 坊っちゃんが学んだ明治時代の学校

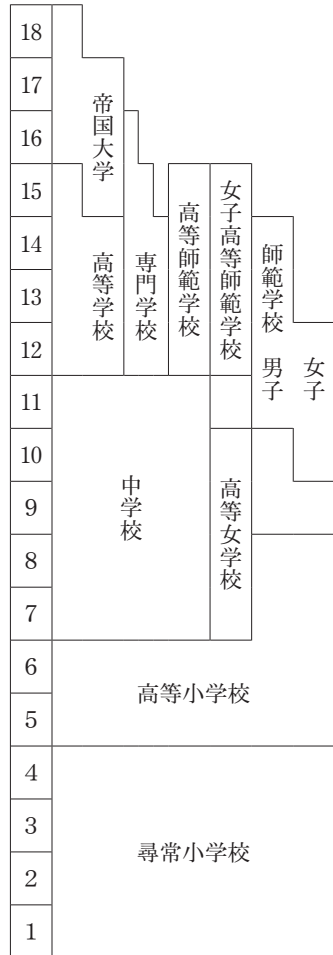
### 坊っちゃんの時代の「複線型（分岐型）」制度

現在の六・三・三・四制の学校制度は、一九四七年（昭和二二）の学校教育法で定められてから今日まで続いている。近年、随分と変化してきたが、まあ「単線型」と言っている制度だ。

ところが、漱石の時代の学校制度は、えらく複雑だった。しかも、コロコロと制度変更がなされる。当時の在校生は、きつと翻弄されていたはずだし、きちんと制度自体を理解していたのだろうか。そう簡単には説明できないので、時期を坊っちゃんのところ限定して、単純に話をしてみよう。

次ページの図は、明治三三年（一九〇〇）の学校制度だ。説明の都合上、かなり簡略化してある。漱石は、もつと古い学校制度下で学んでいたから、この制度は当てはまらない。ただ、おおむね、坊っちゃんと漱石の時代の学校や学歴が説明できそうだ。

《明治33年学校系統図》  
 文部科学省『学制百年史』より  
 (一部簡略化)



まず、小学校は尋常小学校と高等小学校。まだこのころは、義務教育が「尋常」だけの四年間になっていた。だから、ほとんどの人はこの段階か、高等小学校（多くが四年制）が最終学歴だ。

この高等小学校から先が、「複線型」とも「分岐型」とも呼ばれる所以となる。

当時の中学校（旧制中学）は、ほぼ現代の中学校から高等学校に該当する。いわゆる中等教育機関だ。そしてその上に、高等学校（旧制高校）があり、これが現在の大学一、二年だと考えていい。同じように、中学校からは専門学校（たとえば早稲田や慶応など）や高等師範学校（中等教育の教員養成校）にも進めた。現在の大学レベルだと言える。帝国大学は、この上に君臨する「最高学府」というわけだ。これらが高等教育機関である。

この制度のもとで、当時のスーパーエリートは、「中学校↓高等学校↓帝国大学」のようなコースを歩む。それに次ぐ、ボチボチエリートは、「中学校↓専門学校、高等師範学校」などの道がある。ただし、このコースを進めるのは、圧倒的に男子だ。女子の高等教育への進学先は一部の学校に開かれていただけで、制度的にも十分な保障はなかったのだ。「女に学問なんか必要ない」との旧弊が改まらなかった、と言えるだろう。

私の教師経験から言えば、いまは女子の方がよっぽど勉強をする。明治時代のこんな差別的学  
校制度を現代に持ってきたら、人権問題・ジェンダー問題だけでなく、能力ある女性を埋もれさせてしまう。結果、活力なき日本ができること必定だと思う。

### 漱石の学歴・坊っちゃんの学歴

では、漱石と坊っちゃんは、どのコースを歩んだのだろうか。

漱石の学歴は、多くの書籍で紹介されているので話すまでもない。もちろん、先の「中学校↓高等学校↓帝国大学」コースを歩んだスーパーエリートだ。当時の日本人のなかでは、「超」が三つ付くほどの「超超超エリート」だ。

何しろ「帝国大学」は、漱石の入学当時一校しかない。というよりも、「大学」と名乗れる学校は、この「帝国大学」しかなかったのだ。だから、「東京帝国大学」なんて「東京」という地

### 坊っちゃんの推定学歴表

明治15年	生まれ
	↓
明治22年	〇〇尋常小学校入学
	↓
明治26年	〇〇高等小学校入学
	↓
明治30年	ある私立の中学校入学
	↓
明治35年	物理学校入学
	↓
明治38年	物理学校卒業
	↓
	「四国辺りの中学校」教師

名を付ける必要もないわけだ。

いつぼう、坊っちゃんの学歴は、教職に就いた明治三八年九月（おそらく）のときの年齢を、自身の口で「二十三年四カ月ですから」（『坊っちゃん』五）と語っていることから推測できる。

生年月月は、明治一五年五月だ。『坊っちゃん』のなかでは、「ある私立の中学校」に入学するまでが描かれていないので、小学校までの詳細は不明。ただし、計算すると、ほぼ規定の年数どおり

なので、右表のようになりそうだ。どうだろう、漱石には及ばずも、「超」を一つくらいは付けてもいい高学歴である。

どれくらい高学歴かを知るために、当時の、学歴別の割合を見てみよう。

坊っちゃんの出た「物理学校」は、当時はまだ各種学校扱いだった。それでも、レベル的には高等学校・専門学校の水準であったことは間違いない。そうすると、明治三八年当時これに匹敵する学歴・学力を持つ人は、男子の二〇歳人口の「〇・二％」にすぎない。なんと、「千人のうち二人」しかないのだ（天野郁夫『学歴の社会史』平凡社ライブラリー）。



中学校卒の学歴・同等学力を持つ人でさえも、「三・一%」しかない。近年の高校卒の学歴者は、一八歳人口の九〇%をやや下回るくらいだ。「百人に三人」がその学歴者である時代と、「百人に約九〇人」の時代とでは、その意味が違う。

現代の感覚で『坊っちゃん』を読んでもしまうと、坊っちゃんを「単純明快・直情径行でアホな若者」と思い違いをする。ところが、実は坊っちゃんは、「千人のうち二人」に選ばれた「高学歴の超エリート」なのだ。

もちろん、高学歴と人格の善し悪しは別問題に決まってる。

## その二 坊っちゃんの出身校「ある私立の中学校」

### 東京の中学校

坊っちゃんの学歴で最初に登場する学校、それは、「その年の四月におれはある私立の中学校を卒業する」(『坊っちゃん』一)の部分に出てくる。

先ほどの推定学歴表からすると、「ある私立の中学校を卒業」した「その年」は、明治三五年